the Y+T Times

横尾忠則現代美術館ニュース

Yokoo Tadanori Museum of Contemporary Art *NEWS LETTER*

Special Report “阪神・淡路大震災20年展 横尾探検隊 LOST IN YOKOO JUNGLE”

Event Report
01 あがた森魚ライブ
02 レトロマップをつくろう！
03 講演会
04 Y+T上映会

Preview
阪神・淡路大震災20周年展 横尾忠則展 枠と水平線と…
グラフィック・ワークを超えて

Column
所蔵品紹介

Editors' Choice
MUSEUM SHOP・アーカイブルーム

Information
次回展関連イベント
兵庫県立美術館 展覧会スケジュール

SUMMER 06 2014.06.30

Special Report 阪神・淡路大震災20年展

横尾探検隊

ターザンの森400日にたとえて大展覧会

資料を家ごとスクープ。全部は見切れないほどのカタメシーンで大興奮の探検隊でした。

鬱蒼とした密林や、不気味な雰囲気を醸し出す夜の街角、その奥に不思議な世界の広がりを予感させる洞窟……横尾作品に頻繁に登場するこれらの場面には、幼少期の体験が深く関係しています。『横尾探検隊　LOST IN YOKOO JUNGLE』では、幼少期のエピソードを紹介する「少年時代」をプロローグとし、「部会探検」「洞窟・地底探検」「海洋探検」「密林探検」の4章から構成することで、あたかも横尾ワールドを探検するかのように楽しむことができます。

横尾作品と山川登治さんの作品のコラボレーション

なかでも横尾さんの思い入れが強いのが「密林」です。昭和初期、映画『ターザン』の一大ブームを皮切りに、『バルーンの冒険』シリーズ（著・南洋一郎）、『少年王者』（著・山川惣治）といった和製ターザン物語が数多く作られました。密林を縦横無尽に駆け回り、雄叫びを上げる彼らの姿は、幼い横尾さんの心に強烈なインパクトを与えました。大人になってから、実際に密林に赴くなどして描かれた、荒々しいタッチの作品からは、横尾さんが感じた野生や、自然のなかであるがままに生きる姿への憧れを強く感じることができます。

《TARZAN(Blue)》1974｜作家蔵（横尾忠則現代美術館寄託）

「密林探検」のコーナーには、そうした作品や原画類を集め、まるで密林に迷い込んだかのように構成しました。まずは『TARZAN(Blue)』が皆様を出迎えます。展示室の奥からは「あ～ああ～」という雄叫びが聞こえ、まるでターザンが作品の中から叫んでいるかのようです。声に導かれるように足を進めると、密林のなかで雄叫びのポーズをとるモデルを描いた作品や、「叫ぶ」モチーフが特徴的なポスターが目に飛び込んできます。最後の壁面にはワイズミュラー主演の「ターザン」シリーズから、彼が叫んでいる場面だけを抜き出したショートムービーが投影されており、それぞれの雄叫びが共鳴し合うかのような空間となっています。

《シマヤだしの巣（シマヤ）》1978｜横尾忠則現代美術館蔵

出品数の約半数を占めるアーカイブ資料も見逃せません。出品作品を検討するにあたり、横尾さんから「色んなものがあるはずだから、資料の箱をぜんぶ開けて、学芸員自身が探検する気持ちで色々と探してみては」と示唆されました。膨大な箱を前に最初は途方に暮れましたが、開けるたびに現れる貴重な資料の数々に、段々と宝探しをしている気分になっていきました。横尾さんが若い頃の写真や作品に使う予定だったと思われるお菓子のパンフレットなど、展覧会テーマと関係の無いものについよと見とし、時間があっという間に過ぎることも多々ありました。そんな風にアーカイブの由を探検しながら発見した遊りすぐりの資料は、今回の見所の一つです。愛読書『片眼の黄金獅子』（著・南洋一郎）や《シマヤだしの巣（シマヤ）》に使用された素材など、制作の秘密が垣間見える資料をみていると、横尾さんの頭の中を覗くかのような感覚を覚えます。更に今回は横尾さんの憧れの人・山川惣治さんの貴重な作品も出品しています。絵を描いた色紙を交換しあうほど、お二人は仲がよかったそうです。『少年ヒマラ』の色紙を惚れくぐ感じたお客様もいらしたのではないでしょうか。

《謎が謎を呼ぶ》c.1998｜作家蔵（横尾忠則現代美術館寄託）

子どもの頃の体験が、大人になってもなお影響を与え続けることは、誰でも身に覚えがあるはずです。夢中で読んだ江戸川乱歩の小説や密林冒険小説、殺人事件の検死現場、劇場で見た映画など、横尾作品にとって幼少期の体験はインスピレーションの源泉です。そこからは横尾さんが今でも持ち続ける少年の心が感じられると同時に、子どもの頃、目に映るもの全てにワクワクしていた感覚を思い出させてくれます。展覧会タイトルにある「LOST IN」には「迷う」という意味と同時に「熱中する」という意味もあります。本展を探検することで、横尾ワールドにより熱中していただけたのではないでしょうか。

作花麻帆｜本館学芸員補助

《Linda and Richard（関連原画）》c.1984｜作家蔵

Information 次回展関連イベント

阪神・淡路大震災20年展

横尾忠則展 枠と水平線と… グラフィック・ワークを超えて

Yokoo Tadanori : Beyond Graphic Work

2014年7月12日（土）–9月28日（日）

休館日｜月曜日［ただし7月21日（月・祝）、9月15日（月・祝）は開館、7月22日（火）、9月16日（火）は休館］

観覧料｜一般600(480)円、大学生450(360)円、高校生・65歳以上300(240)円、中学生以下無料

※（　）内は20名以上の団体割引料金　※当日券のみの販売となります

※障がいのある方とその介護の方(1名)は各当日料金の半額(65歳以上除く)

キュレーターズ・トーク

講師：担当学芸員
7月26日（土）　8月23日（土）　9月15日（月・祝）
いずれも14:00–14:45
会場：当館 オープンスタジオ
※聴講無料（100席・当日先着順）

枠（わく）な枠ショップ

講師：当館スタッフ
8月8日（金）13:30–16:00
会場：当館 オープンスタジオ
対象：小学1年生～中学3年生
　※小学生は保護者同伴のこと
定員：15名　参加費：1,000円
※要予約
※応募者多数の場合は抽選

シルエットdeアート

講師：当館スタッフ
8月20日（水）13:30–16:00
会場：当館 オープンスタジオ
対象：小学1年生～中学3年生
　※小学生は保護者同伴のこと
定員：15名　参加費：500円
※要予約
※応募者多数の場合は抽選

※各イベントの詳細はHPなどでご確認下さい

兵庫県立美術館｜展覧会スケジュール

特別展　阪神・淡路大震災20年展｜東京・ソウル・台北・長春 一官展に見る近代美術
6月14日（土）–7月21日（月・祝）

宝塚歌劇100周年記念｜宝塚歌劇100年展 ―夢、かがやきつづけて―
8月5日（火）–9月28日（日）

県美プレミアム
特集｜ノアの方舟―荒集による作品たち
3月22日（土）–7月6日（日）

小企画｜美術の中のカたち―手で見る造形
横山裕一展「これがそれだがふれてみよ」
特集｜鳥・獣・人・等 ～新収蔵品を交えて（仮題）
7月19日（土）–11月9日（日）

※兵庫県立美術館の特別展又は県美プレミアムの有料チケット半券ご提示で、
当館の企画展を団体割引料金でご覧いただけます（詳細はHPなどでご確認ください）

Y+T MOCA

〒657-0837 兵庫県神戸市灘区原田通3-8-30
Tel: 078-855-5607(総合案内)　Fax: 078-806-3888
www.ytmoca.jp

開館時間
10:00–18:00
（金・土曜日は10:00–20:00）
※入場は閉館の30分前まで

休館日
月曜日（祝日の場合は翌日）
年末年始
メンテナンス休館

facebook
twitter

シンポジウム「ウォーホルと日本」

撮影：御厨慎一郎　写真提供：森美術館

ウォーホルのアトリエでの貴重な体験に耳を傾けました

（左から）講演に出演された南条史生氏（森美術館館長）、横尾さん、シャイナー氏、近藤健一氏（森美術館キュレーター）

ポップ・アートの第一人者、ウォーホルの大規模な回顧展「アンディ・ウォーホル展：永遠の15分」が六本木の森美術館で開かれました。2014年3月23日、その関連講演「ウォーホルと日本」に、アンディ・ウォーホル美術館館長エリック・シャイナー氏らと共に、横尾さんが出演しました。

横尾さんは、“ファクトリー”と呼ばれるウォーホルのアトリエに実際に足を運んだ、数少ない日本人の一人です。「サングラスをかけたままシルクスクリーンを刷ってるだけと、あんなので正確な色なんてわかるわけがない。サングラスを通してもうまいいくらいだと、実際にはすごく強烈な色になるんですよ。」横尾さんは、もしかして、ウォーホルの色遣いの秘密を垣間見たのかもしれません。

デザインとアートの領域を超えて活動するウォーホルと横尾さん。2つの分野の類似や相違についても、改めて考える貴重な機会となりました。

橋本こずえ｜本館学芸員

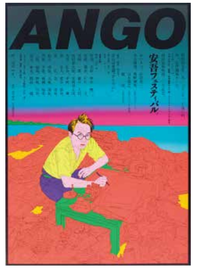
横尾忠則現代美術館ニュース Vol.6
2014年6月30日発行
編集・発行：横尾忠則現代美術館　印刷：株式会社 大伸社

編集後記

本号では初めてコラムに所蔵品紹介のコーナーを設けました。また、ご来館いただいた方に自由にご利用いただける作品検索システムについてもご紹介しています。今後は当館のコレクションやアーカイブ資料に関する情報発信にも力を入れていきたいと思いますので、どうぞご期待ください！（林）

Preview 阪神・淡路大震災20年展 横尾忠則展 枠と水平線と… グラフィック・ワークを超えて

2014年7月12日〈土〉－9月28日〈日〉



《安谷フェスティバル（紀伊国屋ホール）》1974｜国立国際美術館蔵

まず、サブ・タイトルの「グラフィック・ワークを超えて」の説明が必要になるでしょう。何がグラフィック・ワークを超えるのでしょうか？絵画？横尾さん本人？…と、疑問を抱かれるのではないでしょうか。主語は、それらではなく、実は、横尾さんのグラフィック・ワークそのものです。そう答えて、すぐに主語と目的語が同じなのに、超えるというのは矛盾しているとの声が戻ってきそうです。少し数行しますと、横尾さんのグラフィック・ワークは、通常、私たちが考えているようなグラフィック・ワークを超えている、という意味です。クライアントの意向に応じた制作ではなく（もちろん、条件はあるし、意向をまったく無視できないかもしれませんが）、作家の内なる論理によって、自らの表現を展開してきたものなのです。横尾さんのグラフィック・ワークは、アートだというわけですが、その言葉こそ、このサブ・タイトルが意味するところです（アートとデザインとのヒエラルキー［階層］は、ここでは問いません）。それを本展で確認したいのです。そのヒントとして、タイトルの「枠」や「水平線」があります。これらを含む 7 つのテーマで、横尾さんのグラフィック・ワークの特性を明らかにする予定です。ポスター以外に絵画や装幀本なども展示します。媒体が違っても、横尾さんの創作には共通点のあることが理解いただけるでしょう。横尾作品にはじめて接する方にも、横尾ファンにも同じく発見に満ち満ちた、楽しい展覧会になることを願っています。

出原均｜兵庫県立美術館 常設展・コレクション収集管理グループリーダー

Column 所蔵品紹介

《First Cascade》1991｜横尾忠則現代美術館蔵
アクリル、塗料、コラージュ・フィルム、ライトボックス

当館の所蔵品のなかから、「横尾探検隊　LOST IN YOKOO JUNGLE」展にちなんで、ターザンをモチーフにした作品《First Cascade》をご紹介します。この作品はいわゆる「テクナメーション」に分類されるものです。「テクナメーション」とは、蛍光灯などの光源の前に二枚の偏光板を設置し、うち一枚を回転させることで、あたかも光が動いているかのようにみせる技術です。この作品では、まるで澄の水が流れ落ちるかのような効果を生み出しています。

画面左上のターザン、および右下のジェーンはアメリカン・コミックのイメージがコラージュされており、その他の風景や恐竜などは透明アクリル板のうえにアクリル絵具で直接描かれています。また、額縁にもスプレー塗料が施され、作品の構成要素となっています。

横尾さんは '90 年代前半に集中的にテクナメーションを制作していますが、'93～4 年頃の作品では、神話的な壮大なイメージが予めフィルムに CG 出力されていますが、《First Cascade》はテクナメーションとしては初期にあたる作例で、手描きやコラージュなど、より「手業」を感じさせるのが特徴です。

山本淳夫｜本館学芸課長

EVENT REPORT 01 あがた森魚ライブ

2014年3月1日（土）14:00～｜当館 オープンスタジオ（1F）｜出演：あがた森魚（Vo.、G.、Pf）、東谷健司（B）

いきなり客席に降り、横尾さんも出演した映画「僕は天使ちゃいよ」の主題歌をノーマイクで熱唱

昭和を感じさせる、大量の古雑によるステージ構成（協力：突撃洋服店）

2012 年 12 月 23 日の横尾さんの公開制作の際、あがた森魚さんがサプライズで乱入（?）されたのがきっかけで、今回のライブが実現することとなりました。

このライブは「横尾忠則の『昭和 NIPPON』展の関連イベントであり、横尾さんの発案で「昭和」をイメージさせる大量の古着を用いてステージを構成しました。古着の提供と設営は「突撃洋服店」にご協力いただきました。

神戸発祥の同店はアーティスティックなモード表現としての古着の可能性を追求しており、様々な映画やドラマ、舞台などへの衣装提供でも知られています。

立錐の余地もないほどの大入り満員のなか、ステージに登場したあがたさんは、いきなり客席に降り立ち、ノーマイクで「僕は天使ちゃいよ」を熱唱。同曲は 1977 年に公開された、あがたさんが製作・脚本・監督・主演・音楽を務めた同名の映画の主題歌です。横尾さんも出演されていたので、まさにこのライブの幕開けに相応しい選曲だったといえるでしょう。

代表作「赤色エレジー」や「佐藤敬子先生はザンコクな人ですけど」を含む全 7 曲を熱演の後、鳴り止まない拍手に応えて再びステージに登場したあがたさん。アンコールの一曲目は、何とこの日のために用意された「横尾さんの美術館（仮題）」です。横尾さんに捧げられた新曲の初演に立ち会えるなんて、なんという贅沢でしょう！　会場の興奮は、まさに頂点を迎えたのでありました。

山本淳夫｜本館学芸課長

EVENT REPORT 02 ワークショップ「レトロマップをつくろう！」 水道筋商店街で昭和を探してみよう

2014年2月15日（土）13:00–16:00｜当館 オープンスタジオ（1F）、水道筋商店街｜講師：慈憲一（六甲技研代表取締役）

振った獲物は逃さない、昭和ハンターの鋭い眼が光ります

当館最寄の阪急王子公園駅から東へと広がる水道筋商店街。全国的に商店街は大規模ショッピングセンターにおされ、衰退傾向にありますが、神戸市内でも有数の規模を誇る水道筋は今なおたいへん活気があります。ひとくちに水道筋商店街とくくりましたが、実際には大小約 10 もの市場や商店街が入り組んでおり、昭和の面影を残す一大迷宮の様相を呈しています。

今回のワークショップでは、水道筋商店街のエキスパートであり、自称“ナディスト（灘 ist）”の慈憲一さんをナビゲーターに迎え、「これぞ昭和！」というレトロな“ツボ”を探索するツアーを実施しました。ビンテージものの鞭節骨り機やペコちゃん人形、黒電話に招き猫、そして何より人情味溢れたお店の方々と、古き良き「昭和」を感じさせる“ツボ”が満載です。市場には安竹グルメの名店もたくさんあり、そこかしこからいい匂いが漂ってくるのですが、残念ながらワークショップ中は買い物厳禁。ぐっとこらえてポラロイドカメラ（これまたレトロ）のシャッターを切るのに専念します。持ち帰った写真はコメントを記入し、美術館のオープンスタジオに設置されたマップに貼られてレトロマップが完成しました。

マップを見て興味をもち、美術館の帰りに商店街に立ち寄られた方もおられたようです。みなさまも、アート鑑賞とあわせてぜひ商店街まで足を伸ばされてはいかがでしょうか。

山本淳夫｜本館学芸課長

EVENT REPORT 03 講演会 ジャングル・砂漠・雪氷極地…探検千夜一夜物語

2014年4月20日（日）14:00–｜当館 オープンスタジオ（1F）｜講師：二名良日（探検家）

マタギと子どもたちとの活動を語る二名さん 探検を通して様々な方との出会いがあるそうです

「横尾探検隊」にあわせて、探検家の二名さんをお招きし、講演会を開催しました。アラスカのベーリング海峡や青木ヶ原樹海など、世界中のあらゆるところを探検してきた二名さんは、71 歳とは思えないとてもパワフルな方です。

経歴を紹介するため、まずは写真スライドを見ながら、かいつまんでお話をうかがう予定でした。しかし、一枚一枚の写真に込められたエピソードがとても興味深く、大変濃いものばかりで、お話が止まりません。気付けば経歴紹介だけで 1 時間も経っていました。

事前の打合せでも、あまりの話題の豊富さになかなか的を絞れませんでした。そこで思いついたのが、参加者にくじ引きでキーワードを選んでもらう方法です。キーワードは「探検部／四国／自然生物／土地伝説／人間物語／学問芸術」の 6 分野に分かれ、合計約 200 本のくじを、二名さんが自ら伐採してきた竹でつくってくださいました。なかでも「自然生物」から、「昆虫」の話は大ウケでした。例えば、タイのジャングルでのこと、神の使いのような白い犬が探検隊を先導するように現れました。神秘的なものを感じてついて行くと、実はこれがとんでもない犬で、蜂の巣をつついてしまい、一行が蜂に襲われてしまったというのです。

二名さんお手製の竹くじ

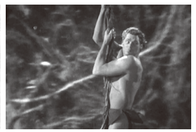
スリル溢れる危険な探検談をユーモアたっぷりに話しながらも、自然の恐ろしさや偉大さがひしひしと伝わってきました。今後もまだまだ探検は続くそうで、これからのご活躍が楽しみです！

作花麻帆｜本館学芸員補助

EVENT REPORT 04 Y+T上映会 横尾さんのターザンの原点 ワイズミュラー主演映画『ターザン』

2014年4月26日（土）18:00–｜当館 オープンスタジオ（1F）｜協力：株式会社コスミック出版

雄叫びをあげて仲間を呼ぶターザン



スタント無しの演技は迫力があります

横尾さんは幼い頃に劇場で映画「ターザン」シリーズを見て、強烈なインパクトを受けます。ターザンの雄叫びや躍動感溢れる動き、スクリーンいっぱいに映し出される動物の姿…。今と違いテレビが珍しくインターネットなんて勿論無かった時代、多くの人々が映画に熱中しました。横尾さんもそのうちの一人。映画を見て興奮した横尾少年は、ターザンの雄叫びを真似ながら映画館の花道の上を歩き回ったそうです。「ターザン」との出会いで横尾さんは「密林」に興味を持ち、密林冒険物語にものめり込んでいきました。

今回は横尾さんが劇場で見た「ターザンの逆襲」を上映しました。全編実際の密林で撮影されており、ゾウやライオンなどの動物も、押し寄せる原住民も全て本物。ほとんど BGM がなく、ゾウの鳴き声や樹々のざわめく音が、かえって生々しく印象に残ります。約 80 年前の映画なので、CG などは一切使われておらず、プリミティブさが逆に新鮮に感じられるのです。映画を鑑賞することによって横尾少年の追体験が出来たのではないでしょうか。

作花麻帆｜本館学芸員補助

Editors' Choice MUSEUM SHOP・アーカイブルーム

MUSEUM SHOP

定休日：休館日に同じ　Tel：078 855 5697

《WORD AND IMAGE（ニューヨーク近代美術館）》1968｜作家蔵（横尾忠則現代美術館寄託）

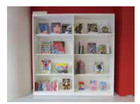
（上）大きめのリュックは収納力抜群
（下）トートバッグ、バンダナも好評発売中です

ミュージアムショップで人気のデザインの一つ、「EYE DOT」シリーズ。見開いた目玉が水玉模様のように並んだこの柄、グロテスクさと可愛らしさを併せ持った外見が魅力です。この目玉、じつは1968年にニューヨーク近代美術館で開催された展覧会「Word and Image」のために横尾さんが手がけたポスターからとられています。言葉（Word）とイメージ（Image）を、開いた口と目玉に置き換え、赤、青、黒の三色を基調にまとめられたこのポスターは、その構成のシンプルさゆえに、強いインパクトを与える作品です。

「EYE DOT」シリーズは、トートバッグやバンダナ、ポーチのほか、新たにリュックやTシャツ、ウオレットなどでも展開されています。色はホワイト、グレーに加えて、これからの季節にぴったりな爽やかなブルーも仲間入りしました。ぜひお手に取ってご覧ください！

林 優｜本館学芸員

アーカイブルーム



（左上）図録や画集、横尾さんの著作など約70冊を紹介しています
（右上）「デジタルアーカイブ（手前）」と「開架図書（奥）」
（右下）検索方法のマニュアルがありますので、どなたでもご利用いただけます

アーカイブルームでは横尾さんにまつわる資料を保存し、調査研究・整理公開を順次行っています。その成果を手軽にご覧いただけるものとして、当館4階アーカイブルームの前に「デジタルアーカイブ（検索システム）」と「開架図書（閲覧コーナー）」があります。

アーカイブ資料だけでなく絵画、ポスターなど収蔵作品もパソコン検索ができますし、画集など貴重な書籍もお手にとってお読みいただけます。まだまだ整備途中ではありますが、横尾さんの多彩な創作活動のベースとなった膨大な資料の一端を垣間見ることができるスペースです。

企画展展示替え期間中も通常通り無料でご利用いただけますので、窓からの景色も楽しみながらお過ごしください。

奥野雅子｜本館学芸員補助